
語ることの出来ない剣士

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

語ることの出来ない剣士

【Nコード】

N9535Z

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

突如として起こった魔物の暴走。それにより勃発した<終焉戦争>は、一人の少年から一度全てを奪った。十年後、成長した少年は<力>を携え故郷を後にする。<スレイジア王国王女・キャロル・ドゥスレイジア><虐められる事に快感を感じる少女・メルシア>。道中出会った二人の少女と共に、ムラクモは<ガルシデア>を巡る旅を始める。 基本緩く行きます

第一話・幕開け

その日、数人の子供がここくハイス村く近辺の草原で遊んでいた。その中の黒髪の少年。名は「ムラクモ・ナイレット」と言う六歳の少年。

ムラクモは誰にでも分け隔て無く接し常に明るいつことから、老若男女問わず人気がある。そんなムラクモを両親である「アドルフ」と「ルミナ」も誇りに思っている。

「じゃあ、また明日！」

「おお！ 明日は勝つからな！」

「ぼくだって！ 明日も勝つよ！」

ハイス村は取り立てて何かがあるという訳では無いが、毎日子どもたちが元気に遊んでいる。村の大人達はそれだけで十分だと思っている。

今日もムラクモは友達と追いかけてこや隠れん坊をして遊び、殆どを勝ちで治めた。今の会話はそれについてのことである。

家に戻ったムラクモは元気に「ただいま」と言い、母であるルミナに抱きついた。ルミナは「あらあら」と言いながらムラクモの頭を優しく撫で、「お帰り」と言い、父であるアドルフも「お帰り」と言いながらムラクモの頭を撫でる。

少し荒っぽいが……。

「さ、手を洗ってきなさい？ もうすぐごはんよ？」
「うん！」

そう元気に返事をして、ムラクモは奥へと小走りで向かい、その背中を、二人は優しい眼差しで見つめていた。

その後、手を洗って戻ってきたムラクモは、今日あったことを楽しそうに話し、ルミナに「落ち着きなさい」と言われても尚話し続け、それは夕食の席でも同様だった。両親はその話をしつかりと聞きながら、明日からもムラクモが元気に過ごせる様にと、それだけを願っていた。

「お父さん、お母さん、お休みなさい」

「ああ、お休み。ゆっくり寝るんだぞ？」

「お休み、ムラクモ。明日も負けるんじゃないわよ？」

「うん」

寝室に入り、布団に入るとムラクモはすぐに夢の中へと旅立った。

「……………」

「……………」

先程とは打って変わって静かになった家の中で、アドルフとルミナは寄り添い合っていた。

「ムラクモも、もう六歳になるのね……………」

静寂を破ったのはルミナであった。アドルフは静かにその言葉に頷く。

「こどもの成長って、早いわね……本当に」

「そうだな。もう少し成長すれば、力のことを話しても良いかも知れない」

「そうね。あの子なら、きっと正しく使うことが出来るわ」

「ああ。……なあ、ルミナ？」

「なに？」

「ムラクモが、村を出ると言ったらどうする？」

その問いにルミナは黙り込んでしまった。

ルミナも、もちろんアドルフもムラクモがずっと村に止まっているような子ではないと分かっている。が、やはり子とずっと暮らしたいと言う思いはある。

「あの子が、それを本当に望むなら、私はその意思を尊重したいわ。あなたもそうよね？」

「……ああ」

もちろん、それはまだまだ先のことだろう。だが、ルミナの言う様に子の成長と言うのは早い。

その時はすぐに来るだろう。

「明日からも、あの子が元気に過ごせますように」

「心配ないさ。何せオレ達の息子なんだからな？」

「……ふふ、そうね」

二人は笑い合い、軽い口づけを交わした。

その後、ムラクモを挟む様にして横になり、二人は眠った。

星が煌めく夜空に、一人の少女がいた。後ろには少女に付き従うように、赤黒い鱗に包まれた巨体を持つくブラッド・ドラゴンくが静かに羽ばたいている。地上には、ハイス村近辺に棲む魔物。くラビくやくガルムくが群れを成している。

「……………」

少女は無言のまま下を見る。

そこにあるのはハイス村。

少女はおもむろに右手を上げ、一泊おいて振り下ろした。

グオオオオオオオオオオオオオオ！！

直後、雷鳴すら生温い程の咆吼が夜空の空気を震わせ、それに続くようにラビ達も雄叫びを上げた。

その日、ハイス村はたった一人の少年を残し、滅びを迎えた。

第一話・幕開け（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第二話・失った物、そして……（前書き）

ムラクモ一人称です。途中から一人称が変わります。

第二話・失った物、そして……

目の前でお父さんとお母さんが殺された。

次はぼくを殺そうとガルムが襲いかかってきた。

そこからの記憶は無い。

翌朝、気が付いた時に見たのは、荒れ果てた家と、ぼくに手を伸ばして死んでいるお父さんとお母さんだった。

喉が引きつるのを感じながら、ぼくは二人に呼びかける。

いや、呼びかけようとした。

「
」

けれど出来なかった。

声が出なかったから。

その後、何度試しても、ぼくの口から声が出ることは無かった。

原因は分からないけど、ぼくは声を出せなくなり、大切な人たちを失った。

声は出なかったけど、涙だけは止まることなく流れ続けて……でもお父さんとお母さんをこのままにしておくなんてこともできなくて、ぼくはお母さんの冷たくなった体を引きずって家の裏まで行き穴を掘って埋めた。

次にお父さんの体を引きずって、お母さんの隣に埋めた。

その時に見た村は、昨日までの村の面影すらない程めちゃくちゃにされていて、至る所に人が転がっていた。

それを見て、また涙があふれてきたぼくは天井がなくなった家に飛び込み、隅っこで体を丸くした。

それから、何日経ったのか分からない。

けど、じっとしているとお父さんとお母さんが殺された時のことを思い出してしまふ。

気が付くと、ぼくは家から飛び出していた。

そのまま走り続けて足を止めた時、ぼくは近くの森にいた。

暴れる心臓が落ち着くのを待っていると、少し遠くに魔物の姿が見えた。

そいつは、二つの長い耳と黒い毛と赤い目を持つ魔物、<ラビ>だった。

見ていると、そいつもぼくに気付いたようで、ぼくを食べようとでも思っているのか、四本の足を使って走ってきた。

「
！」

声を出さずに叫び、ぼくもラビに向かって走った。

ただがむしゃらに殴って、体中至る所を噛みつかれたりして、服もボロボロになったけど、それでも手は止めなかった。

止めたら、そこで終わってしまう気がしたから。

仰向けに倒れて、鉛色の空を見上げる。

結果で言えば、ぼくは負けなかった。

でも、勝手もいなかった。

戦っている途中で、ラビの方が諦めたのか帰って行ったから。

この状態で、また魔物が来たら今度こそ死んでしまう。

そう思って、無理矢理体を起こしてぼくは村へと戻って、家に入
った途端意識を失った。

翌朝、お父さんとお母さんが殺された時の夢を見て目が覚めた。

「……………っ」

また涙があふれてきて、ぼくは、今度は自分の意思で森を目指し
て走った。

ラビを見つけて突撃し、無我夢中で拳を振るった。

体を動かしてさえいれば、二人のことを思い出さないから。

夢中で体を動かし続けた。

今度も勝ちも負けもしなかった。

家に戻ってまた眠る。

翌朝、今度は空腹で目が覚めた。

そういえば、ここ数日は何も飲み食いしていなかったことを思い出し、空腹であることを自覚すると、お腹の音が止まなくなった。

でも、もちろん食料なんて家にはない。

あつたとしても、とっくに腐っていると思う。

でもここハイス村は、いつかくききん>というものが訪れた時に備えて、毎年食料を少しずつ村の倉庫に保管していたから、もしかしたら少しくらいは食べられるものが残っているかも知れない。

奥にある倉庫に向かう途中、友達を見つけたけど、もちろん死んでいた。

他の人たちも同じ様に。

破壊された倉庫の破片などを避けながら中に入り、見てみると思った通り殆どがぐちゃぐちゃに潰れていて、とても食べられる状態じゃなかった。

その中を漁り、なんとか食べられるものを探し出し、少しだけ食べ、あとは家に持って帰った。

これからは、できるだけ少ない食料で毎日を過ごさないとけない。

ごはんを食べて、また森に向かいぼくはラビと戦った。

相変わらず勝つことはなかったけど、二日前に比べればだいぶマシにはなった。

お腹を叩けば動きを鈍らせることができるのかも分かった。

その後、また家に戻って眠った。

それから、二日に一回朝にごはんを食べるだけで、後は戦って眠るを繰り返して生活した。

服がもつ着ることができなくなってしまったから、落ちていた布を適当に巻き付けた。

戦っている内に、傷の治りが早いことに気付いた。

最初は、ただ夢中だったから気が付かなかったのかも知れない。

ラビに噛まれた程度の傷なら、眠っている間にぜんぶ治っていて、偶に大きな怪我を負っても丸一日眠っていれば完治した。

でも、戦うなら都合の良い体であることは事実だから、特に気にせず戦い続けた。

約一年が経ち、ラビなら勝てる様になった。

お父さんが使っていた短剣を持ち、今度は灰色の毛を持つ魔物、
＜ガルム＞と戦ってみようと思い、一体で行動しているガルムを探して森の中を歩き、見つけた所で周りに仲間がいないかどうかを確認して攻撃を仕掛けた。

ラビとは全く違う動きをするガルムに、最初はもちろん勝つことはできなくて、何度も逃げた。

途中、仲間やラビが来ることもあって本当に危ない時もあった。

それでも、戦うことは止めなかった。

二人のことを思い出して涙を流すことは無くなったけど、やっぱり思い出すのは辛いから……体を動かし続けた。

更に三年が経過した頃には、ラビはもちろんガルムにも負けなくなり、とつくに尽きた食糧を補うためなんとか食べられる様にして食べた。

最初は食べるのが辛かったけど、食べる内になれて、今は普通に食えることができる様になった。

骨を適当な所に埋めて、それに向けて合掌し、今日もオレは森へと向かった。

「グウウウウ……」

目の前で四体のガルムが威嚇している。

木を削って作った自前の木刀を構えて、オレも戦闘態勢を整えようと、ガルムが一斉に飛び掛かってきた。

上体を捻ったり木刀で防いだりして捌き、一体を木刀で叩き、一体を殴って地面に叩きつける。

残っている二体に、踏み込んで一気に接近し横風に一閃して吹っ飛ばすと後の木に叩きつけられ、地面に転がった。

木刀を逆手に持ち、背側に振るとガルムの鳴き声が聞こえ、次いで倒れる音が聞こえた。

最初に殴ったガルムが攻撃を仕掛けてきた訳だ。

四体全てを戦闘不能にすると、茂みから一斉に仲間が飛び出してきた。

保険をかけていたらしく、十以上はいる。

改めて戦闘態勢を取り、ガルムに備える

そして、一瞬の静寂の後聞こえたのはガルムの吠える越えではなく、かと言ってももちろんオレの声でもない。

グオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

森全体どころか、大陸全土に響きそうな、正しく天を衝くような咆吼だった。

それを聞き、ガルムたちは仲間を置き去りにして一目散に逃げ出した。

大きな翼が羽ばたいている音が聞こえて上空を見ると、巨大な影が差し、辺り一帯の木々を潰しながら、数メートル先に巨大な四肢を支えとして降り立った。

そいつは、赤黒い鱗に包まれた巨大な体と、同じく巨大な翼を持つ、本来このくスレイジア大陸くにはいない筈のくブラッド・ドラゴンくだった。

ブラッド・ドラゴンは周辺を見渡し倒れているガルムを見つけると、その大きな口を開き躊躇することなく開きかぶりついた。

ガルムの鳴き声と同時に血が噴き出し地面を汚す。

勝てる訳がないことは分かっていた、けれど逃げる事ができなかった。

ラビやガルムなんかとは比べるのはおこがましい程の圧倒的な威圧感が、オレの体から自由を奪っていた。

どれだけ動かそうと思っても、足は竦みきつてしまい指一本すら動かすことができない。

何も考えられずにいると、目の前に迫ったブラッド・ドラゴンが口を開き、闇が広がった。

親父とお袋、友達、村の人たちの顔。

それらが、次々と浮かんでは消えていった。

死ぬのか？

こんな所で、何も出来ないまま オレは死ぬのか？

そんなのはご免だ！

瞬間、ブラッド・ドラゴンの動きが止まり、おかしい動きを始めた。

いや、可笑しいと言うより、「あり得ない」と言っただ方が正しいか？

首の位置がずれている？

そんな感じだった。

そのことに疑問を抱いていると、何かがブラッド・ドラゴンの体を斬り裂いた。

そして、呆気なく崩れ去ったブラッド・ドラゴンは何か黒い物に呑み込まれ、肉片一つ残さずその場から消え、後にはなぎ倒された木々と、ブラッド・ドラゴンの血が残った。

黒い何かは、ゆっくりとオレに向かってきて、今度こそオレは終わると思い目を閉じた。

だが、どれだけ待っても何の衝撃も来ず、オレはそつと目を開けた。

目に映ったのは、黒い何かがまるでオレのことを心配でもしているかのように、目の前を忙しなく右往左往しているという……どう説明すれば良いのかよく分からない状況だった。

第二話・失った物、そして……（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第三話・受け継いだ物（前書き）

今回でプロローグは終わりです。次回からは三人称で進めていきます。

第三話・受け継いだ物

何もしてくる気配はないので、まずは様子を見ようと思い一歩下がった。のだが、黒い何かはまるで、「離れないでくれ」と言わんばかりにびったりとくっついてきて、胸に頭？を擦りつけてきた。

子が外出しようとする親にくっついて、「行かないでくれ」とせがんでいる様な物だと考えればわかりやすいか……？

まあ、よく分からないが……敵じゃないのかも知れない。

それなら、オレとしては助かる。ブラッド・ドラゴンをあんな簡単に斬り裂く奴が相手では、オレなど紙を斬る様に斬られてしまう。と、考えている間も、黒いのはオレにびったりくっついていた。

お前はオレの敵なのか？

「！」

いきなり黒いのが、ぶんぶんと勢いよく体？を振った。オレが思ったことを否定しているかの様なタイミングの良さに驚き、今度は別のことを思ってみる。

オレの味方か？

そうすると、今度は大げさな程体を上下させた。

その後もとりあえず思いつくことを思ってみると、全てに上下に振るか左右に振るか分からないと言う様に傾げる様な動作をし、こいつが、「オレの思っていることが分かる」ということが分かった。

さっきのブラッド・ドラゴンがまだいると思っているのか、あたりに魔物の気配は全くと言って良いほど無い。

安心して黒いのと会話、の様な物が出来た。

暫くそうして過ごした後、家に帰ることにして森を出口へと向けて歩く。

その間も、黒いのはオレから離れず、寝る時も離れることが無かった。

翌朝、目を覚ますと黒いのはいなくなっていた。

「……………」

寂しいと……また出てきて欲しいと……そう、思った。

「！」

思った途端、足下から黒いのが出てきてオレに飛びついてきた。

訳も分らずにいと、黒いのがオレの手を引き立ち上げらせ目の前で動きを止めた。

まるで、オレから何か言うのを待っているかの様に。

だから、オレは思いで伝えた。

よろしくな？

黒いのは、また何度も頷いた。

それから六年。

俺は十六歳になった。

成長した俺がしたことは、村を綺麗にすることだった。村人たちは、もう既にみんな骨になってしまっているが、そのまま放置しておいては決して報われることはないだろう。

埋葬することで、少しでも安らぐことが出来るのなら……そう思い、家族ごとに近くに埋葬した。それから、家の残骸なんかをくノア>に呑み込んで貰い片付けた。

ノアと言うのは、黒い奴に俺がつけた名前だ。

ノアは、六年前ブラッド・ドラゴンに襲われそうになった時に現れた俺の力で、それ以来俺の相棒だ。聞いてみた所、十年前俺だけが生き残ったのも、ノアが守ってくれたかららしい。

あの時意識が途切れたのは、その時の俺ではノアの力に耐えられなかったからだと思っている。ブラッド・ドラゴンの時は、ハッキリと意識があつたからな……。

ノアは俺の思いを感じ取り、それによって形を変える。あの時、ブラッド・ドラゴンを斬り刻んだのは、俺に「死にたくない」と言う思いを、敵を倒すことで形に表した結果なのだろう。

それと、刀や槍、槌や弓矢など、色々な武器の形にもなれるから、戦闘の幅も広がり、場所に応じた戦い方が出来る。

弓矢に至っては、矢が切れる心配が無いからかなり使い勝手が良い。

まあ、俺は専ら刀だが……槍や槌も試してはみたが、親父から受け継いだのか刀の形が一番なじんだ。だから戦う時は、すぐに刀として出てくる様にノアにも頼んでいる。

少し脱線したか……。

とりあえず、普段の状態のノアは質量などに何の関係も無く呑み込むことが出来る。聞いてみた所、限界は無いと言うから大した物だと思う。実際目の前でブラッド・ドラゴンが全て呑み込まれたのを見た俺としては、疑うことなど最初から無い訳だ。

現に今も、言い方は悪いが、ただの木と化した家の残骸をどんどん呑み込んで……見ている内に全部呑み込み終わった。一体呑み込まれた物はどこに行っているのだろうか？と気にはなるが、なんとなく怖い気もするので聞いていない。

もし、見せてやると言う意味で俺まで呑み込まれたらどうなるか……。

最後に自分の家の片付けを始めた。

と言つても、十年間使っていた家だからな……そこまで散らかつてはいない。少し整理するだけで終わりにしようと思い、細かい塵や埃をノアを箒の形にして掃いて、それだけで終わりにした。

が、ノアが家の床を見てずっと動かなかった。

ノア？

呼びかけても返事をしない。こんなことは今まで無かつたから、俺も気になりノアが見ている一点を見る。

ノア！

一瞬にして槌に変わったノアを振りかぶって床に叩きつけると、床を砕いたとは思えない、鋼を叩いた様なガキン！という音が響いた

そして出てきたのは、少し大きな木箱だった。

それだけなら、「なぜ、こんな物があるのか？」という単なる疑問だけで終わっていただろうが、それ以上に俺は 俺とノアは驚きを隠せなかった。

ブラッド・ドラゴンすら簡単に斬り伏せたノアの攻撃をいとも簡単ににはじき返したのだから、「驚くな」という方が無理だ。

なんとか平常心を保ち、いつもの状態に戻ったノアにははじき返されても大丈夫な様に後ろで支えてもらい、俺はそつと木箱に手を

伸ばした。

だが、警戒していたのは裏腹に俺の手は難無く木箱に届いた。

両手でゆっくりと箱を開け中を見ると、そこには綺麗に置かれた一着の服と、その上に赤く輝く宝石が詰め込まれたペンダントがあった。ペンダントを取り、次に服を取る。すると、その下に二つに畳まれた紙が置いてあった。

服とペンダントを下に置いて紙を取り、開く。

『我等が最愛の息子であるムラクモへ

お前がこの手紙を読んでいると言うことは、オレは今母さんに怒られているのか、それとも、オレもルミナも死んだのか……そのどちらかかも知れないな。まあ、どちらにせよ、お前ももう十六歳になったということか、めでたいことだな。

さて、本題に入ろう。

力のことは既に知っているな？ その力はルミナからお前に受け継がれたモノだ。詳しいことは、使っていく過程で覚えてくれ。そろそろ母さん変わる』

そこで、字は親父のモノからお袋のモノに変わった。

『愛しのムラクモへ』

力のことは、お父さんが書いたとおりよ。どうしても分からないけど、私はその力を生まれた時から持っていたの。それで何かがあったって言う訳じゃ無いんだけど、一つだけ伝えておくわ。

力の使い方をどうか誤らないで。

私が力について伝えたいのはそれだけよ。

さて、手紙を読んでいるなら、箱に入っていた服とペンダントも見てるわよね？ その服は、昔お父さんが使っていた物よ？ 見た目は只の着物と変わらないけど、物理攻撃や魔法に対する防御力はかなりの物だから、安心して良いわよ？

ペンダントは、私からの贈り物。

装備者の魔力を増幅させる力と、ある程度の魔法ならはじき返す力があるわ。

この二つがあれば何も問題ないわ！ さあ！ 自分の目で見て、自分の手で触れて、自分の足で世界を回ってきなさい！ 村とは比べものにならないドキドキが貴方を待ってるわよ！

あ、それと、大事な人が出来たら連れてきてね？　楽しみにしてるから』

手紙はそこで終わった。

とりあえず、思ったのは……「お袋ってこんな性格だったっけ？」ということだ。それと、紙面とは言え、こつも急に変わられると呼んでる側としては少し戸惑う。

もしかしくなくてもこつちが「素」なんだろうか？

黒い着物を着て、ペンダントを首から提げ、少し髪が邪魔だったから、首の辺りで束ねた。

準備を整えた俺は家の裏に回り、親父とお袋が眠っている場所に向けて手を合わせた。

『行つてきます』

口だけを動かし、心の中でそう言つて、俺は外に向けてノアと共に歩き出した。

村の出入り口を出て、振り返り見たのは、家なんて一つも無いとても「村」とは言えない状態のハイス村。

十六年間過ごしたこの村に、思い入れが無い訳などなく、名残惜しい気持ちが胸に広がる。

そんな俺の気持ちを察してか、ノアがすり寄ってきた。

大丈夫だと、そう思いを込めながら撫でると、安心したのかそつと離れ、自分から消えた。

俺の意思に反応して出てくることが殆どだが、偶にこつやって自分から消えたり出てきたりする。

「……………」

さて、出発するでしょうか。

何が起こるかなんて分からないが、それでこそ旅つてのは楽しい物だろう。

面白い奴にも会えるかも知れないしな。

第三話・受け継いだ物（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

次はムラクモのプロフィールと世界の事を少し載せます。興味が無ければ飛ばしてくれて構いません。

主人公・世界観紹介（前書き）

必要無いとは思いますが一応載せておきます。

主人公・世界観紹介

名前：ムラクモ・ナイレット 男 十六歳

属性：闇

身長：178?

体重：67?

利き腕：左

正確：温厚。

切れると怖い

……具体的に言うと、終始笑顔を浮かべて相手に直に怒気やらをぶつける。

スレイジア大陸北端にあるハイス村に住む極々一般的な少年だったが、突如魔物の襲撃を受け両親と村の仲間を失う。原因は分らないが、その時に声も失ってしまった。それから四年間は一人で魔物と闘いながら生活し、本来はスレイジア大陸にはいない筈のブラッド・ドラゴンに襲われそうになった際、力が目覚め退ける。

我流で戦い続けた為、気配を隠す手段や探る手段に長けている。

それ以来は、その力にノアと名をつけ共に六年間生活し、十六歳になったある日、両親から譲り受けた着物とペンダントを装備し村を出た。

ノアを刀の形に変形させ戦う。

ノア

ルミナから受け継がれたムラクモの持つ力。主の思念に反応して形を変える。

世界名：ガルシデア

<ライドメール家>が治める<ライドメール大陸>

<マクトウェイ家>が治める<マクトウェイ大陸>

<イノセイド家>が治める<イノセイド大陸>

<ファイゼン家>が治める<ファイゼン大陸>

<スレイジア家>が治める<スレイジア大陸>の五つの大陸から成り立っている。これら五つはそれぞれが<世界貴族>と呼ばれており、力の強い所から大きな大陸を治めている。

見て分かる通り、<スレイジア家>は五つの中で最下位に属している。

中央にある最も規模の大きな<ライドメール大陸>を東西南北から囲むように他四つの大陸がある。

本来<ブラッド・ドラゴン>等の龍種は<ライドメール大陸>に多く棲息している。

<終焉戦争>

十年前、世界各地で魔物が原因不明の暴走を起こし、それにより勃発した人と魔物の戦争。

波の様に押し寄せる魔物達の軍勢が、世界を飲み込むように見えた事からそう名付けられた。

<属性>

火・水・風・地・氷・雷・光・闇の八つの属性が存在し、一人一つが基本となっている。確かめるには体内のマナを指先に集める、又は手のひらの上に出現させる方法があり、その色によって判断される。

火は赤。

水は青と言った具合。

だからムラクモは黒。

補足説明 マナの色と髪・目の色は一切関係ない。

水で赤い髪の人もあるし、火で青い髪の人もある。

ムラクモは単に偶然一致しただけ。

主人公・世界観紹介（後書き）

こんな感じです。

出ないよう努めますが、以降矛盾点などを見つけた時は遠慮無く報告してください。

第四話・キャロルⅡスレイジア

ムラクモが旅に出たその日の深夜、スレイジア王国付近にあるく始まりの森>に一人の少女がいた。

実は今、ムラクモもこの森にいたのだが、両者とも互いの存在に気が付いていない。

「はあ、はあ……………ここまで、来れば、大丈夫かしら？」

この少女の名はくキャロルⅡスレイジア>。

スレイジア王国王女、十四歳である。

まだ幼さの残る、けれども端正な顔立ち。

流れる様に腰元まで届いている銀色の髪は月光を受けてキラキラと光を放ち、蒼い右目は冷たい印象など与えることなく、逆に暖かい印象を抱かせる。

そして、何より見る者が注目するのは、そのく黒い左目>だろう。

これには少し事情があるのだが、それは追々説明するでしょう。

そして腰にはスレイジア家の家宝であるく宝刀・シュヴァイス>を提げている。

鞘、柄から刀身　その全てが白で統一されている。

「それにしても……やけに警備が薄かったけど、どうしてなんだろう？」

現在キャロルが疑問に思っていることは、城を抜け出すさいの警備の薄さである。

本来ならば、深夜とはいえ、城に仕える騎士団が交代制で警備を行っているが、キャロルの自室付近には人っ子一人いなかったのだ。

陽の高い内に準備を整えていたキャロルは、まずは部屋の番をしている二人の騎士をどのようにして撒こうかを考えていたのだが、結局良い案が浮かばずに夜を迎えた。

だが、いざ外に出てみるとそこには番の二人どころか他の騎士すらいなかった。

「もしかして……王さ……お父様達には気付かれた？　でも、それなら追っ手が来るはずだし……うーん……」

キャロルの中では、「気付いているなら警備を厚くする筈」と言う考えが浮かんでおり、ある種の矛盾点を見つけたことで余計に頭を抱えてしまっていた。

実際はキャロルの考えの通り、王も王妃も娘がここ数日の内に城を抜け出すことを知っていた。

キャロルが外の世界に人一倍思いを馳せていたこと両親だけでなく城に仕える者全員が知っていることであり、皆その願いを叶えて

あげたいと強く思っていた。

そのことを知るのは当分は先のことであるが……。

「考えても仕方ないか。今は気付かれないだけで、明日になったら追っ手が出されるだろうし……とりあえず進もう」

考えを切り替え、キャロルは森を進み始めた。

と言っても、現在の時刻は既に前述した通り既に深夜を回っている。

少し進んだところでキャロルは腰に付けている小さなバッグから一人一人らすっぽり包み込める程の大きさを持つ布を取り出した。

このバッグは限界こそあるが、その限界に至るまでならどれだけ大きな物でも収納することが出来るという便利な物だ。

キャロルが取り出した布は、<グリツサ>という、火属性の魔物の毛皮から出来ており、毛皮そのものが熱を帯びているので夜や寒い地方では重宝されている。

「この辺りでいいかな？ 魔物も、思ってた程いないし」

魔物がいないその理由　キャロルがムラクモの様に気配を探る術に長けていたならすぐに分かっただろうが、これまで十四年間、キャロルは魔物との戦闘を行ったことがない。

今までは、騎士団の訓練を近くで見ながら我流で剣術の腕を磨き、十一歳になった時から団員の中に混じり実戦訓練も行っていたが、やはり相手が王女となつては手加減抜きで戦うと言つのは憚られる。そういった騎士が殆どだった。

本人がいくら「手加減しないでください」と頼んでも、やはりどこかで手を抜いてしまふのは仕方がないことであらう。

そういった理由で、キャロルはまだ本気の戦いと言つのを経験したことがない。

だが、剣術の腕は騎士団員にも負けていない　いや、間違いなく騎士団よりも強いだろう。

それほどキャロルの剣の才覚には目を見張る物があつた。

（森を抜けたら、道なりに進んで<レークナ>に行つて、ギルドに登録して……その後のことは……それから考えればいいか）

眠い頭ではそれ以上考えることが出来ず、キャロルは眠りについた。

ギルドと言うのは、それぞれの街にある施設であり、魔物の討伐や薬草の採取などを行い、報酬を得る場であると同時に、酒場の機能も果たしている。

もし、この考えを両親含め城の者が聞いていたなら、全員が止め

に入っていただろう。

まだ十四歳の少女をそんな所に送り出すのは親でなくとも心配する。

それほど、スレイジア家が国民から受ける信頼が厚いということでもあるのだが。

翌日、目が覚めたキャロルは水筒の水を顔にかけて残っていた眠気を飛ばし、そこで大きな力を感じたのだが、一瞬だったため気の所為と片付けた。

荷物を片付け、出発しようとしたキャロルはそこで、はたと自分が王女だと気付いた。

おかしい表現だが、彼女に取って自分が王女だということは当たり前ではない。

事情はあるが、それも追々説明するでしょう。

とにかくにも、自分が王女だと気付いたキャロルは、自身に姿を変える魔法をかけた。

銀色の髪は深紅に変わり、両目も同じ紅に変え、自分の髪を一房つかんで魔法がかかっていることを確認した所で奥へ向けて出発した。

途中、キャロルはいくらなんでも魔物が少なすぎることに疑問を

感じていた。

（ここまで一回も魔物に遭遇しないなんて……どうなってるのかしら？）

出発して数時間、そろそろ中心部に到達すると言いつのに、一度も魔物はキャラルの前に姿を現さなかった。

（実戦を一度も経験出来ないのは……先のことを考えると不安なんだけど、魔物と呼ぶ魔法なんてないし……）

恐らく一般的な十四歳の少女なら、魔物と呼ぶ魔法云々を考えることは無いだろうが、育った環境が違うのだから仕方ないと言えば仕方ないのだろう。

そして、これから起こることはある意味ではキャラルに取って幸運である。

ギョオオオオオオオオ！！

「ッ！ なに！？」

突然聞こえた咆吼に驚き、キャラルは辺りを警戒した。

次いで聞こえてきたのは大きな地響きと、木々が倒れていく音。

そして見えたのは

「な……何で、龍種がこんな所にいるのよ」

自身の数十倍はあろうかと言う巨体を持つ青いドラゴン、<ワイバーン>である。

初めて遭遇した魔物が龍種であることにキャラルは戸惑ってしまい、なぜスレイジア大陸に龍種がいるのかと言う疑問を考える暇も無く、只ワイバーンを目の前にして動けなくなるだけであった。

そして、そんなキャラルをワイバーンがみすみす見逃す訳も無く、低い唸り声を上げた直後その口から炎を吹き付けた。

「しまっ
」

やっと体を動かそうと思った時には既に遅く、炎は眼前まで迫っており、キャラルは恐怖のあまり目を閉じてしまった。

そんなキャラルを突如現れた一人の人物が炎の届く寸前の所で救出した。

同時に足下から黒い靄の様な物が出現し、ワイバーンに向かっていったかと思うと一瞬にしてその体を斬り刻み、全てを呑み込んだ。

突然の浮遊感に襲われたキャラルは何が起こったのか、と思い目を開けた。

そして、キャロルを助け出した人物もワイバーンが吞み込まれたことを確認し、自分が助け出した少女の身に何も起こっていないか確かめようと視線を下に降ろした。

そうなると当然二人の視線は交錯し、見合う形となる。

「
……………」

少しの間両者とも無言となった。

（真つ黒な髪……綺麗だなあ……どんなお手入れしてるんだろう？
それに見た目は細いけど、体つきもがっしりしてるし、有名な冒険者だつたりするのかな？）

キャロルがそんなことを考えてる間に、黒い靄の様な物も役目を終えたと言わんばかりに青年の足下に戻っていきやがて消えた。

その後、青年はキャロルをそつと地面に降ろした。

「（もう少し抱っこしたい欲しかったかも……）えっと……助け
てくれて、ありがとう」

ワイバーンはどこに行ったのか？

今の黒いのは何なのか？

疑問があるにはあつたが、キャロルはまずはお礼を言うべきだと思
いそう言った。

キャロルの言葉に、青年は笑いながら「構わない」と言う様に首を横に振り、その様子を見たキャロルは名を名乗ることにした。

「貴方、名前は？ わたしは、キャ」

そこでキャロルはまた自分が王族だと気づき、名乗りを不自然なところで止めてしまった。

「？」

青年の方もいきなり途切れた少女の言葉に、どうしたのかと首を傾けるが、当のキャロルはそのことに気付いておらず、

（どうしよう？ 仮にもわたしは王女だし、本名を言ったら、いくら姿を変えてるって言っても、この人もわたしのことに気付くよね？ うあ……えっと……あ、そうだ！ 別の名前を名乗れば良いんだ！ えっと、キャロルド・スレイジアだから………
…「キャシー」！ うん！ キャシーにしよう！）

と、いうことを考えていた。

本人は気付いていないが、考えている最中頭を抱えたり呻き声を上げたり、体を捻ったりと実に様々な動きをしていた為、青年のキャロルに対する第一印象は「面白い奴」と言う物になっていたのは、当然と言えば当然だろう。

「ごめんなさいね？ わたしは『キャシー』。貴方の名前は？」
「……………」

キャロルの問いに、青年は無言で返した。

一瞬、聞こえていないのかと思ったキャラルであったが、この距離で、しかも周りの音が一切していない状況で聞こえていないというのはあり得ないだろうという結論に至り、実際青年にはちゃんと聞こえていた。

「ねえ、ちゃんと聞いてる？」

青年は聞こえていると言う意味を込めて頷いた。

だが、そうするとキャラルから「じゃあ、答えて」と返ってくるのは当たり前だ。

青年はどうしようか困ってしまい、導き出した答えが、

「あつ！ ちょっと、どこ行くのよ！？」

その場から退散することだった。

走って森を進み、出口へと近づいていく青年をキャラルも負けじと追いかける。

途中、ついさっきまで全く出てこなかった魔物達が出てくるようになったが、今のキャラルにそんなことを気にする余裕は無く、構わずに青年を追い続けた。

当の青年にももちろん魔物は襲いかかっているが、青年は黒い刀を用いて一刀の下に斬り捨てていく。

走りながら、キャラルはその剣筋に見惚れるという器用なことを

行っており、同時にどこから刀を出したのかと言つ疑問も抱いていた。

「刀所か荷物を入れる物すら持つてないのに……どうなってるの？
それに、服も見たことない物だし」

青年が来ている服はキャラルの様に上と下で分かれている物では無く、一枚の布で作られており、腰に巻いている大きな帯で止めているという……キャラルにとっては不思議でならない衣装としての目に写っている。

ドレスなどを見たことが無いキャラルでは無いが、見たことの無い型をしている為そう写っている。

疑問を抱きながらも、木の枝などはしっかりと避けながら青年を追いかけて、夢中になっていたからか、すぐに出口へと辿り着いた。

先に抜けていた青年は流石に疲れたのか少し先で息を整えていた。

「はあ……はあ……やっと、追いついた」

もちろんその青年を追いかけていたキャラルも疲れているが、ここで逃がすと次も追いかける自身は無い為、小走りで駆け寄り青年の前に出た。

「どうしていきなり走り出したのかは分からないけど……名前くらい教えてくれてもいいんじゃない？」

「……………」

それでも青年は口を開かない。

代わりに出てきたのは、あの黒い靄だった。

「！」

何か来ると思ったキャロルはシュヴァイスを抜き構え、それを見た青年は素直に感心していた。

隙が無いからである。

だからと言って腕も達者とは限らないが。

「何をするつもり？」

「……」

相変わらず青年は答えず、またも代わりに黒い靄が動いた。

地面に伸びたそれは土を削り何かを書いていく。

「？」

自分に危害を加えるつもりはないと、なんとなくだが分かったキャロルは構えを解き、けれどシュヴァイスは握ったままでそれを眺め、最後にジャリ、と音を立てて黒い靄は地面から離れ、その文字をキャロルは目で追った。

「？ これ、なんて書いてあるの？」

しかし、読むことができなかった。

「？」

首を傾げた青年は、自分もその文字を読み、自分視点で書いていることに気付きキャロルを手招きした。

それに従い、青年の横に並んだキャロルは、青年から文字列を指さされもう一度眺め、その文字が青年から見た方で書かれていたことに気付き、その文字を声に出して読んだ。

そこにはこう書かれていた。

「『俺の名前は、ムラクモ・ナイレット』」

と。

第四話・キャロルド・スレイジア（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

次回からキャロルはキャシーと統一します。

偶にキャロルになるかも知れませんが、殆どの場合はキャシーと表記します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9535z/>

語ることの出来ない剣士

2012年1月1日21時19分発行